

にしわきパワーアップシート（国語）

年	組	番	名前
---	---	---	----

1 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

観察からわかったこと

二〇〇〇年から二〇〇五年までの合計三百日に及ぶ観察の中で、私が記録した「落ち穂拾い」の回数は四十七回に上る。集めた記録からわかったのは、次のようなことだ。

- ・「落ち穂拾い」は、三月から五月にかけての春に集中していた
- ・「落ち穂拾い」で、シカは十六種二十二品目の植物を採食した
- ・「落ち穂拾い」をするシカの数、一回当たり一頭から二十一頭とばらつきがあった。
- ・サルが樹上で採食するときには、途中で食べ飽きて枝を捨てることなどが多く、木の下には意外に多くの植物が落下していた。

仮説

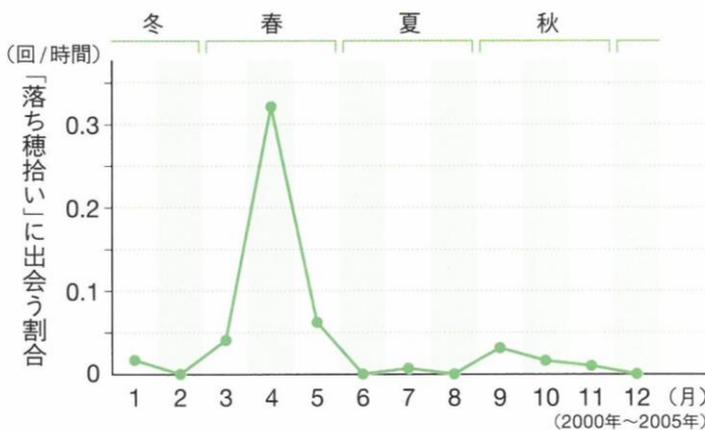
記録をつけながら、私はシカが「落ち穂拾い」をする理由について考えていた。わざわざサルがいる木の下まで集まってくるのだから、サルの落とす食物には、シカにとって何か魅力があるはずだ。また、その行動が春に集中するというのも不思議である。私は、シカが「落ち穂拾い」をする理由について次のような仮説を立て、二つの調査を行うことにした。

- 一 春は、シカの本来の食物が不足している。
- 二 サルの落とす食物のほうだが、栄養価が高い。

〈出典〉「シカの『落ち穂拾い』」―フィールドノートの記録から― 辻 大和（「国語1」光村図書より）

図1 「落ち穂拾い」に出会う割合の変化

割合は、月ごとの「落ち穂拾い」の観察回数を、その月の総観察時間で割って計算した。



1月	2回	(143.9時間中)
2月	0回	(117.3時間中)
3月	9回	(225.6時間中)
4月	6回	(18.7時間中)
5月	13回	(203.3時間中)
6月	0回	(92.3時間中)
⋮	⋮	⋮
12月	0回	(97.6時間中)

(1) 表1の「シカが採食した植物」について、複数の季節で採食している植物は何ですか。

「・」

(2) (1)の植物について、それぞれの季節で採食した部位を答えなさい。

例 植物 季節 部位
ホオノキ 夏 葉

「	「	「	「	「	「
「	「	「	「	「	「
「	「	「	「	「	「
「	「	「	「	「	「

(3) 「観察から分かったこと」について、図1・表1から分かる内容は次のうちのどれですか。

- ア 「落ち穂拾い」は、三月から五月にかけての春に集中していた
- イ 「落ち穂拾い」で、シカは十六種二十二品目の植物を採食した
- ウ 「落ち穂拾い」をするシカの数は、一回当たり一頭から二十一頭とばらつきがあった。
- エ サルが樹上で採食するときには、途中で食べ飽きて枝を捨てることなどが多く、木の下には意外に多くの植物が落下していた。

図1 「表1」

表1 「落ち穂拾い」でシカが採食した植物

春 3月～5月	エノキ(葉) オオモミジ(葉) カマツカ(つぼみ・葉) クマノミズキ(冬芽) ケヤキ(葉) ソメイヨシノ(花・果実・葉) フジ(花) ブナ(花)
夏 6月～8月	ホオノキ(葉)
秋 9月～11月	アカガシ(堅果) ウラジロノキ(果実) エノキ(葉) オオウラジロノキ(果実) カキノキ(果実・葉) クマノミズキ(果実) クマヤナギ(葉) コナラ(堅果) ナラ類(堅果)
冬 12月～2月	エノキ(樹皮)

(2000年～2005年)

にしわきパワーアップシート（国語）

年	組	番	名前
---	---	---	----

1 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

観察からわかったこと

シカの「落ち穂拾い」

二〇〇〇年から二〇〇五年までの合計三百日に及ぶ観察の中で、私が記録した「落ち穂拾い」の回数は四十七回に上る。集めた記録からわかったのは、次のようなことだ。

- ・「落ち穂拾い」は、三月から五月にかけての春に集中していた
- ・「落ち穂拾い」で、シカは十六種二十二品目の植物を採食した
- ・「落ち穂拾い」をするシカの数、一回当たり一頭から二十一頭とばらつきがあった。
- ・サルが樹上で採食するときには、途中で食べ飽きて枝を捨てることなどが多く、木の下には意外に多くの植物が落下していた。

仮説

記録をつけながら、私はシカが「落ち穂拾い」をする理由について考えていた。わざわざサルがいる木の下まで集まってくるのだから、サルの落とす食物には、シカにとって何か魅力があるはずだ。また、その行動が春に集中するというのも不思議である。

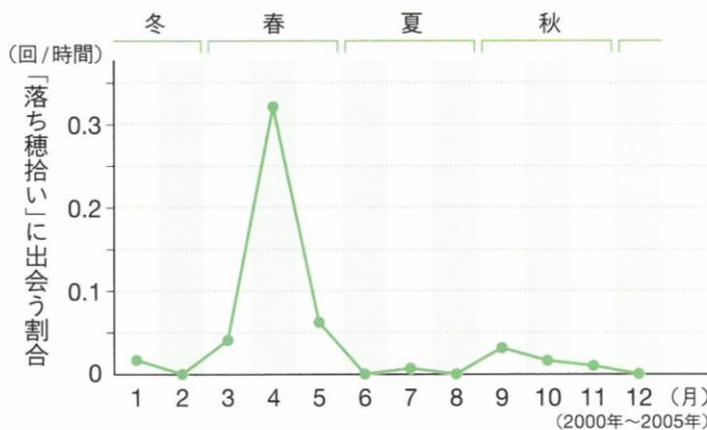
私は、シカが「落ち穂拾い」をする理由について次のような仮説を立て、二つの調査を行うことにした。

- 一 春は、シカの本来の食物が不足している。
- 二 サルの落とす食物のほうに、栄養価が高い。

〈出典〉「シカの『落ち穂拾い』」フィールドノートの記録から」辻 大和（『国語1』光村図書より）

図1 「落ち穂拾い」に出会う割合の変化

割合は、月ごとの「落ち穂拾い」の観察回数を、その月の総観察時間で割って計算した。



月	回数	時間 (時間中)
1月	2回	(143.9時間中)
2月	0回	(117.3時間中)
3月	9回	(225.6時間中)
4月	6回	(18.7時間中)
5月	13回	(203.3時間中)
6月	0回	(92.3時間中)
⋮	⋮	⋮
12月	0回	(97.6時間中)

(1) 表1の「シカが採食した植物」について、複数の季節で採食している植物は何ですか。

「 エノキ 」・「 クマノミズキ 」

(2) (1)の植物について、それぞれの季節で採食した部位を答えなさい。

植物	季節	部位
例 ホオノキ	夏	葉

「クマノミズキ」	「春」	「冬芽」
	「秋」	「果実」

「エノキ」	「春」	「葉」
	「秋」	「葉」
	「冬」	「樹皮」

(3) 「観察から分かったこと」について、図1・表1から分かる内容は次のうちのどれですか。

- ア 「落ち穂拾い」は、三月から五月にかけての春に集中していた
- イ 「落ち穂拾い」で、シカは十六種二十二品目の植物を採食した
- ウ 「落ち穂拾い」をするシカの数は、一回当たり一頭から二十一頭とばらつきがあった。
- エ サルが樹上で採食するときには、途中で食べ飽きて枝を捨てることなどが多く、木の下には意外に多くの植物が落下していた。

図1「ア」表1「イ」

表1 「落ち穂拾い」でシカが採食した植物

春 3月～5月	エノキ(葉) オオモミジ(葉) カマツカ(つぼみ・葉) クマノミズキ(冬芽) ケヤキ(葉) ソメイヨシノ(花・果実・葉) フジ(花) ブナ(花)
夏 6月～8月	ホオノキ(葉)
秋 9月～11月	アカガシ(堅果) ウラジロノキ(果実) エノキ(葉) オオウラジロノキ(果実) カキノキ(果実・葉) クマノミズキ(果実) クマヤナギ(葉) コナラ(堅果) ナラ類(堅果)
冬 12月～2月	エノキ(樹皮)

(2000年～2005年)

年		組		番		名前	
にしわきパワーアップシート（国語）							

1 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

プリンの行方 ゆくえ

自分の部屋に入ると、私は椅子に座った。そして、机の上の鏡をじっと見つめた。怒った顔。何食わぬ顔。いろいろな表情を作ってみる。うん、上出来、上出来。

階段を上がる足音が聞こえた。兄だろうか。ドタドタと、いつになく大きく、急ぎ足だ。乱暴にドアが開かれたので振り返ると、やはり兄だった。

「どうしたの？」と私は尋ねた。

「冷蔵庫にあったプリンが、見当たらないんだ。」

深刻そうな兄の声に、思わず吹き出しそうになった。

「何よ、そんなことで勝手に部屋に入ってこないで。」

私は少し怒ったように言った。

「一つ余っていたはずなのに……。お母さんが食べちゃったのかな。」

「知らないよ、そんなこと。」

私は何食わぬ顔で答えた。

「そうか、変だなあ……。」

【出題の趣旨】

「読解力」④ 推論

文脈を捉え、伏線に気づく。

【学習指導要領】

■学習指導要領における領域・内容： 第一学年 読むこと

指導事項： 場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えること。

□出題趣旨： 文章中の語句や文どつしが関連し合うことで生まれる意味のつながりを意識し、伏線に気づくことのできる文章をより読み解くことができる。

プリンゆくえの行方

自分の部屋に入ると、私は椅子に座った。そして、机の上の鏡をじっと見つめた。怒った顔。何食わぬ顔。いろいろな表情を作ってみる。うん、上出来、上出来。

階段を上がる足音が聞こえた。兄だろうか。ドタドタと、いつになく大きく、急ぎ足だ。乱暴にドアが開かれたので振り返ると、やはり兄だった。

「どうしたの？」と私は尋ねた。

「冷蔵庫にあったプリンが、見当たらないんだ。」

深刻そうな兄の声に、思わず吹き出しそふになった。

「何よ、そんなことで勝手に部屋に入ってこないで。」

私は少し怒ったように言った。

「一つ余っていたはずなのに……。お母さんが食べちゃったのかか。」

「知らないよ、そんなこと。」

私は何食わぬ顔で答えた。

「そうか、変だなあ……。」

伏線……後の展開や結末を暗示する「見せりげない表現」。

伏線となる表現が、後で出てくる表現と関連し合って文脈上の意味を生み出し、読み手に「なるほど」「そつだったのか」という納得感を与える。

〔適用題〕

「背後に立つ兄の険しい表情」となる伏線の表現はどこか？

文脈……文章中の語句や文どつしが関連し合う

ことで生まれる意味のつながり。

兄は私の机の上をのぞき込むと、

「なんだ、また鏡なんか見てるのか。」と言った。

「関係ないでしょ。早く出て行って。」

兄の足音が聞こえなくなった後、私は机の引き出しからプリンを取り出した。うまくいったぞ。早く胃袋の中に隠してしまおう。スプーンですくって一口食べようとしたとき、心臓がどきんと鳴った。鏡には、プリンを持った私の姿と、その後後に立つ兄の険しい表情が写っていた。

うん、上出来、上出来。

次の条件に合わせて、なぜ、「私」は鏡を見ながら「いろいろな表情」を作っていたのか説明しなさい。

〈出典〉「新しい国語1」東京書籍

〈条件〉

○一文で書くこと。

○書き出しの言葉「私」が鏡を見ながらいろいろな表情を作っていたのは、「」に続くように書くこと。

○四十字以上、七十字以内で書くこと。なお、書き出しの言葉も字数にふくむ。句点（。）、読点

（、）も文字数にふくむ。

◆の印から書きましょう。

			「私」が鏡を見ながらいろいろな表情を作って
	いた	いた	
	た	の	
	か	は	
	ら	は	
		兄	
		と	
		話	
		す	
		と	
		き	
		に	
		備	
		え	
		た	
		練	
		習	
		を	
		し	
		て	

80字

60字

40字

20字

【レポート】

マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか

2年1組 石田正太

1 テーマ

私の好きな食べ物は「すし」である。特に「トロ（マグロの中でも脂の多い腹の部分）がいちばん好きなすし種である。その「トロ」について調べてみると、昔はマグロそのものが今ほど人気のある食べ物ではなかったことや、今では好まれている「トロ」が昔は見向きもされなかったことが分かり、興味が湧いた。

そこで、「マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか」というテーマを立てて、詳しく調べてみることにした。

2 調査方法

- ・学校図書や地域の図書館にある百科事典・その他の事典で、「マグロ」「トロ」について調べて基本情報を集める。
- ・集めた基本情報をもとに、インターネットで検索して大まかに調べ、さらに図書を探して詳しく調べる。

3 調査結果

(1) マグロが不人気だったわけ

江戸時代の中頃まで、マグロは人気がなかった。主な理由として、次の3点が挙げられる。

第1に、効果的な保存ができなかった。当時、マグロは主に東北や九州で水揚げされており、人口の多い江戸まで運ぶのに時間がかかった。冷蔵庫などもなく、白身魚と比べても、マグロのような赤身魚は鮮度が落ちやすかった。

第2に、味の好みは昔と今とは違っていた。「江戸料理集」（1674年）には、「マグロは、下魚でご馳走には使えない。」（現代語訳）と書かれている（現代語訳の引用は、「マグロのすべて」48ページより）。当時は、脂っこくない淡泊な食べ物が好まれており、マグロの味に対する評価は低かった。

第3に、マグロの呼び名がよくなかった。マグロはかつて「しび」とよばれ、「死日」を連想させるということから、不吉な魚とされていた。一方、カツオは「勝つ」につながるということで、人気があった。

(2) マグロが食べ始められた理由

江戸時代後期には、食材としてのマグロが広く受け入れられていった。その要因として、19世紀前半から半ばにかけて、江戸の近海でマグロの豊漁が続き、価格が急落したことが挙げられる。人々は新鮮なマグロを手軽に消費し、食べきれない分はしょうゆに浸して保存した。そうすることで鮮度の低下を防ぎ、生臭さを消すこともできた。すし店がマグロの赤身を使い始めたのもこの頃からで、切り身をしょうゆ漬けにしたところから「づけ」とよばれるようになった。

年	にしわき パワー アップ シート (国語)
組	
番	
名前	

中二国【文章内容を捉える】

月 日

〈出典〉「新しい国語2」東京書籍

(次ページに続く)

(3) トロはいつから人気のすし種となったのか

明治時代になっても、マグロはすし種として人気が出るには至らなかった。脂の特に多い「大トロ」に至っては、鮮魚店で最も安いくらいの値がついていた。

しかし、大正時代（1912年～1926年）になって、東京・日本橋のすし店が、マグロの腹身をすし種として取り入れ、トロという呼び名で売り出すと、次第に人気が出てきた。背景として、日本人の好みも、西洋料理の影響を受け、肉類と同じように脂肪を含む食品へと変わりつつあったこともある。第二次世界大戦後、食料の不足、特に動物性タンパク質と脂肪分の欠乏という事情もあり、トロの人気はいっそう高まっていった。その後の冷凍技術の発展も、マグロ・トロの普及に役立った。

4 考察

マグロ・トロに対する評価が変化してきた過程を調べてみると、食材の評価を決める要因がいろいろあることに気づく。例えば、保存のしやすさ、味、名前による印象、供給量、価格、栄養分などである。そうした要因が、その時代の人々の価値観と結びつくことで、食文化が形成されていくのだろう。

5 参考資料

- ・「世界大百科事典」（加藤周一・編、〇〇社、2007年）
- ・「マグロのすべて」（河野博、茂木正人・編、〇〇社、2007年）
- ・「たべもの起源事典」（岡田哲・編、△△出版、2003年）
- ・「江戸前の味」（長崎福三・著、□□書店、2000年）
- ・「かつお・まぐろと日本人」（海老沢志朗・著、□□書店、1996年）

1 このレポートで述べられている、マグロが日本で受け入れられた理由として適切なものを、次のアからオまでの中から全て選びなさい。

ア マグロは、主に東北や九州で水揚げされていたが、19世紀前半から半ばにかけて、江戸の近海でマグロの豊漁が続き、価格が急落したため。

イ マグロのような赤身魚は、白身魚と比べて鮮度が落ちやすく、味に対する評価が低かったため。

ウ 日本人の好みも、脂っこくない淡泊な食べ物へと変わったため。

エ 第二次大戦後、動物性タンパク質と脂肪分の欠乏という事情があり、マグロの腹身のトロの人気が高まったため。

オ 冷凍技術が発展したため、「大トロ」が鮮魚店で最も安いくらいの値がついたから。

【レポート】

マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか

2年1組 石田正太

1 テーマ

私の好きな食べ物は「すし」である。特に「トロ（マグロの中でも脂の多い腹の部分）がいちばん好きなすし種である。その「トロ」について調べてみると、昔はマグロそのものが今ほど人気のある食べ物ではなかったことや、今では好まれている「トロ」が昔は見向きもされなかったことが分かり、興味が湧いた。

そこで、「マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか」というテーマを立てて、詳しく調べてみることにした。

2 調査方法

- ・学校図書や地域の図書館にある百科事典・その他の事典で、「マグロ」「トロ」について調べて基本情報を集める。
- ・集めた基本情報をもとに、インターネットで検索して大まかに調べ、さらに図書を探して詳しく調べる。

3 調査結果

(1) マグロが不人気だったわけ

江戸時代の中頃まで、マグロは人気がなかった。主な理由として、次の3点が挙げられる。

第1に、効果的な保存ができなかった。当時、マグロは主に東北や九州で水揚げされており、人口の多い江戸まで運ぶのに時間がかかった。冷蔵庫などもなく、自身魚と比べても、マグロのような赤身魚は鮮度が落ちやすかった。

第2に、味の好みが昔と今とでは違っていた。「江戸料理集」（1674年）には、「マグロは、下魚でご馳走には使えない。」（現代語訳）と書かれている（現代語訳の引用は、「マグロのすべて」48ページより）。当時は、脂っこくない淡泊な食べ物が好まれており、マグロの味に対する評価は低かった。

第3に、マグロの呼び名がよくなかった。マグロはかつて「しび」とよばれ、「死日」を連想させるということから、不吉な魚とされていた。一方、カツオは「勝つ」につながるということで、人気があった。

(2) マグロが食べ始められた理由

江戸時代後期には、食材としてのマグロが広く受け入れられていった。その要因として、19世紀前半から半ばにかけて、江戸の近海でマグロの豊漁が続き、価格が急落したことが挙げられる。人々は新鮮なマグロを手軽に消費し、食べきれない分はしょうゆに浸して保存した。そうすることで鮮度の低下を防ぎ、生臭さを消すこともできた。すし店がマグロの赤身を使い始めたのもこの頃からで、切り身をしょうゆ漬けにしたところから「づけ」とよばれるようになった。

年	にしわき パワー アップ シート (国語)
組	
番	
名前	

中二国「文章内容を捉える」解答例

月 日

〈出典〉「新しい国語2」東京書籍

(次ページに続く)

(3) トロはいつから人気のすし種となったのか

明治時代になっても、マグロはすし種として人気が出るには至らなかった。脂の特に多い「大トロ」に至っては、鮮魚店で最も安いくらいの値がついていた。

しかし、大正時代（1912年～1926年）になって、東京・日本橋のすし店が、マグロの腹身をすし種として取り入れ、トロという呼び名で売り出すと、次第に人気が出てきた。背景として、日本人の好みも、西洋料理の影響を受け、肉類と同じように脂肪を含む食品へと変わりつつあったこともある。第二次世界大戦後、食料の不足、特に動物性タンパク質と脂肪分の欠乏という事情もあり、トロの人気はいっそう高まっていった。その後の冷凍技術の発展も、マグロ・トロの普及に役立った。

4 考察

マグロ・トロに対する評価が変化してきた過程を調べてみると、食材の評価を決める要因がいろいろあることに気づく。例えば、保存のしやすさ、味、名前による印象、供給量、価格、栄養分などである。そうした要因が、その時代の人々の価値観と結びつくことで、食文化が形成されていくのだろう。

5 参考資料

- ・「世界大百科事典」（加藤周一・編、〇〇社、2007年）
- ・「マグロのすべて」（河野博、茂木正人・編、〇〇社、2007年）
- ・「たべもの起源事典」（岡田哲・編、△△出版、2003年）
- ・「江戸前の味」（長崎福三・著、□□書店、2000年）
- ・「かつお・まぐろと日本人」（海老沢志朗・著、□□書店、1996年）

1

このレポートで述べられている、マグロが日本で受け入れられた理由として適切なものを、次のアからオまでの中から全て選びなさい。

ア マグロは、主に東北や九州で水揚げされていたが、19世紀前半から半ばにかけて、江戸の近海でマグロの豊漁が続き、価格が急落したため。

イ マグロのような赤身魚は、白身魚と比べて鮮度が落ちやすく、味に対する評価が低かったため。

ウ 日本人の好みも、脂っこくない淡泊な食べ物へと変わったため。

エ 第二次大戦後、動物性タンパク質と脂肪分の欠乏という事情があり、マグロの腹身のトロの人气が高まったため。

オ 冷凍技術が発展したため、「大トロ」が鮮魚店で最も安いくらいの値がついたから。

ア
エ

にしわきパワーアップシート（国語）

年		組		番		名前	
---	--	---	--	---	--	----	--

1 次の意見文を読んで、問いに答えなさい。

【意見文】

「言葉遣い」は「心遣い」

「健康調査用紙、ちゃんと提出したの。」

「出したし……。」

「なんか耳ざわりな言葉遣いね。」

昨日の母と私の会話だ。友人とも毎日、こんな調子でコミュニケーションをとり合っている母の言葉を小言のように聞いていた私は、ふと自分の言葉遣いについて考えてみたいと思った。

中学生になって、給食委員になった時のことだ。そばにいた三年生の給食委員長に

「これ、どうすんの。」

と聞いたたら、

「どうすんのじゃなくて、どうするんですかだよ。」

と、笑いながら言われた。私ははっとした。同年代の人に言われたことが少しショックだった。

六年生の時にも、落とし物を拾って先生に届けるのに、

「先生、落とし物。」

と言いながら渡したら、

「先生は、落とし物じゃないよ。先生はその辺に落ちていないから。」

と言われた。その時は、先生がおもしろいことを言ったと大笑いした。でも、今考えると「笑いごと」ではない。

また、語尾一つとっても、その意味が違ってくることがある。私が

「明日、雨。」

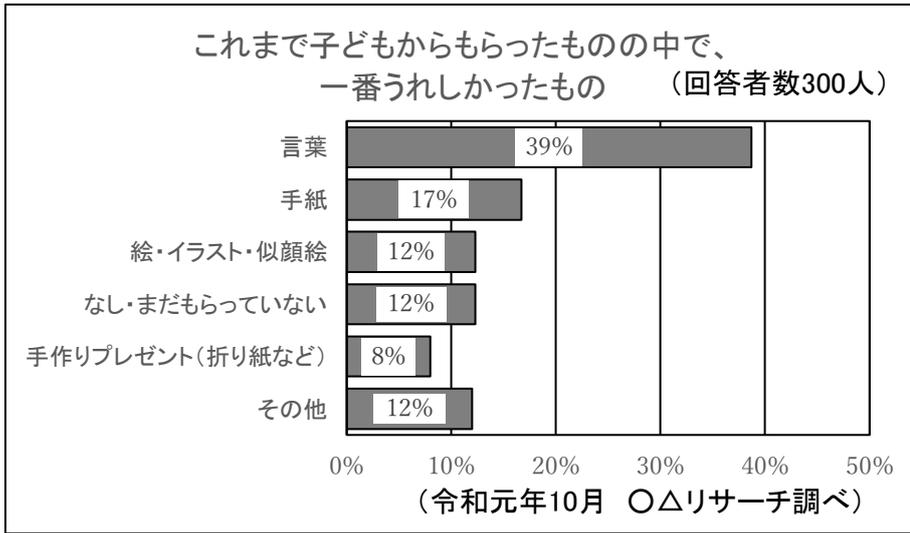
①

とすると、明日の天気を「質問」されていると受け取る祖母と、明日の天気を雨なのだと私が「お知らせ」していると受け取る父がいる。

言葉は、伝わらないという意味がない。そして、伝えればよいというものでもない。言葉は、時には相手をいたわり、時には相手を敬い、時には相手を励ます、すばらしい道具だ。「言葉遣い」は「心遣い」だと思う。普段の生活の中で、互いに思いやり、気を配ることができたら、きっとその気持ちを言葉に乗せることができるのではないだろうか。

社会に出ていった時に、気持ちのよい言葉のキャッチボールができるように、普段から自分の言葉遣いを見直すことが大切だと思う。

【新聞に掲載されていたアンケート】



〈出典〉「中学校国語2」学校図書

【意見文】の——線部「すばらしい道具」の具体例に自分の経験を挙げるだけでは足りないと考え、【新聞に掲載されていたアンケート】にある情報を用いて、①のところに文章を書き加えることにしました。あなたなら、どのような文章を書き加えますか。次の書き出しに続けて、【新聞に掲載されていたアンケート】を見ていない人にも分かるように書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり、行間に書き加えたりしてもかまいません。

また、令和元年10月に○△リサーチが行ったアンケート「これまで子どもからもらったものの中で、一番うれしかったもの」の結果からも分かることがある。例えば、

--	--	--	--

また、令和元年10月に○△リサーチが行ったアンケート「これまで子どもからもらったものの中で、一番うれしかったもの」の結果からも分かることがある。例えば、

回答した親の38%は、これまで子どもからもらったものの中で一番うれしかったものは「言葉」だと答えている。言葉で伝わる心遣いに対するうれしさが表れている。